

【講演 1】「百舌鳥・古市古墳群」とは何か

白石 太一郎

ただいまご紹介いただきました白石でございます。皆さんよくご承知のように、市長さんからもお話をございましたが、本年 7 月に「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産として、正式に登録されました。これは、ひとえに大阪府、それからこの羽曳野市、藤井寺市、堺市からなる関係自治体の関係者の方々、さらにそれを支えられた市民の方々のご努力のたまものであります、私からも、改めてお祝いを申し上げたいと思います。



今日私に与えられましたテーマは、まず議論の口火を切るという意味で、「百舌鳥・古市古墳群」とは一体何なのかということで少し話をするようにということなんですが、実はこれ、なかなか難しい問題で、短時間で「百舌鳥・古市古墳群」とは何かということをお話しするのはなかなか荷が重い課題です。ただ、今回のシンポジウムのテーマである「世界文化遺産のあるまちへ グローバルアップ」ということで、これをいかに地元の今後の発展に生かしていくかということは、この地域にとってきわめて大切な問題です。市民の皆さまがこの古市古墳群の将来像を考えていただく上で、私の話が何らかの参考になれば幸いでございます。

1. 列島最大と第二位の巨大前方後円墳を中心に形成された古墳群

それでまず 1 番目の問題ですが、それは「列島最大と第二位の巨大前方後円墳を中心に形成された古墳群である」ということにしておきました。

何といっても、この「百舌鳥・古市古墳群」の重要性は、日本列島で最大の、私どもは大仙陵古墳と呼んでおりますが、今回の登録では、「仁徳天皇陵古墳」ということになっております。皆さんよくご承知のように、これが日本列島最大の前方後円墳です。図 1 に宮内庁が作られました測量図をあげておきましたけれども、この墳丘の長さだけでも大体 500 メートルあるわけですね。その周りに三重の、水を満々とたたえた濠をめぐらしておりまして、さらにその外側にも、陪塚と呼んでおりますが、この古墳の中心的な被葬者と何らかの関係を持った人、



図 1 堺市 大仙陵古墳（現仁徳陵）

ないしは人を埋めた古墳ばかりじゃなくて、本来ならこの大仙陵古墳に埋めるべき副葬品だけを埋納したような古墳もあるわけです。この墳丘と周りの濠、それからそれぞれの堤ですね、それからその周りの陪塚が営まれた区域を含むと、これはどう少なく見積もっても、南北が1キロメートル、東西が800メートル、約1キロメートルという、とんでもなく大きな墳墓であるということになるわけです。

この大仙陵古墳を中心に形成されているのが、堺市の百舌鳥古墳群でありまして、それに対して、この古市古墳群の方は、図2、私どもは誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳と呼んでおりますが、現在応神天皇陵になっている古墳ですね、これが墳丘の長さは420メートルで大仙陵古墳より少し小さいわけですが、少し高さが高いといいますか、墳丘の体積でいえば、この大仙陵古墳よりも大きいんだということを、ご当地出身の梅原末治先生などが早くからいっておられました。

体積でいえば日本で最大の前方後円墳であるということになるわけですが、これを中心に形成されているのが、この古市古墳群にほかならないわけであります。何といってもまず「百舌鳥・古市古墳群」の重要性というのは、日本列島で最大の大仙陵古墳と、それから2番目に大きな、あるいは体積で言えば1番大きな、この誉田御廟山古墳を中心とする、まさに日本を代表する古墳群であるということになるわけであります。

それで、これまた皆さんよくご承知のことだと思いますが、日本列島では、卑弥呼が亡くなる頃3世紀の中頃から、6世紀の終わりぐらいまで、大体350年の間、各地に大規模な古墳がたくさん造られます。それで、その中にはこういう前方後円墳、あるいは、後ろも四角、前も四角い前方後方墳もございますし、それから単なる円墳や方墳、それから帆立貝式古墳とか、様々な形の古墳があるわけであります。

数の上では、単なる円墳や方墳が圧倒的に多いわけであります。けれども、日本列島でこの古墳時代（先ほどいいました、3世紀中頃から6世紀の終わりぐらいまでを、考古学では古墳時代と呼んでおりますが）に造られました古墳を、墳丘の規模の順に並べてみると、実は第1位の堺市の大仙陵古墳を筆頭に、第47番目の古墳までがすべて前方後円墳です。1番目から47番目までは全部前方後円墳で、そしてようやく48番目に1基だけ、前方後方墳、後ろも四角、前も四角い前方後方墳が入ってきます。これは、奈良県の天理市にある西山古墳という、長さ190メートルあまりの前方後方墳なんですが、それが1基あり、そのあとまた前方後円墳がずらっと並ぶわけですね。ですからいいかえれば、この古墳時代、日本列島各地で営まれた古墳のうち、墳丘規模の大規模なものはほとんど前方後円墳だといつても差し支えないわけです。言い方を変えれば、古墳時代、各地の有力な支配者層が営んだ古墳は実は前方後円墳なんだ、そういうふうに申し上げてもよいわけであります。

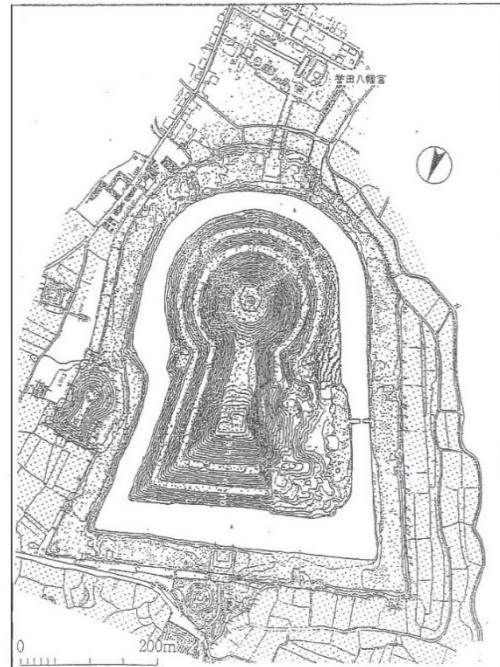


図2 羽曳野市 誉田御廟山古墳（現応神陵）

この日本の古墳を特徴づける、日本列島独自の、こういう特異な形の古墳、これがどうして出てきたかということはよくわからないんですけれども、弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけて、こういう墳丘を持った四角い古墳、あるいは丸い古墳が日本列島にたくさん造られます。周りには、その土を取った跡でもあるんでしょうが、溝がめぐっているわけですね。溝の中に円形、丸い古墳、あるいは方形の古墳があるわけですが、溝の外からですね、墳丘に至る通路のようなものがくっついているわけですね。この通路の部分、溝の外から墳丘に至る通路状の部分が発達したのが、いわゆる前方後円墳の前方部、前方後方墳の前方部に当たるということが明らかにされているわけでありますし、もともと壺の形を模したとか、そういうことでは決してないわけです。

いずれにしてもこういう形の古墳が盛んに造られた時代が、古墳時代にほかならないということ、その最大規模の前方後円墳が、「百舌鳥・古市古墳群」にあるんだと、これが大切なことだと思います。

それからもう 1 つはですね、これは特に第二次大戦後の考古学的な研究の大きな成果と申し上げていいかと思うんですが、この古墳の造営ですね。前方後円墳を中心とする古墳の造営が、単にそういう特異な形のお墓づくりが流行した、というだけではないんです。

実はこの時代は、日本列島各地の有力な政治的首長たちが、この畿内の、近畿地方中央部のこの大和や河内、あるいは和泉の大首長といつていいかと思いますが、この大和や河内、和泉の大首長を中心に、政治連合を形成していた時代なんですね。これが、文献による古代史の先生方が「ヤマト政権」と呼ぶ、いわゆる首長連合の時代であったわけです。実はこのヤマト政権と呼ばれる、もちろん日本列島の南の端と北の端は入っておりませんけれども、汎列島的な政治連合の政治体制、政治秩序と密接な関係を持って営まれたのが、この古墳にほかならないということが、明らかにされているわけであります。

つまり古墳というものは、政治連合の政治秩序を表現しているわけです。いいかえれば、その政治連合の盟主といいますか、リーダーは、それぞれの時期で最大の古墳、それも前方後円墳を営んでいる。後に「大王」、「天皇」と呼ばれることになる、このヤマト政権の盟主が最大の古墳を造っているということになるわけです。そういうことで、これは 5 世紀の初頭から前半にかけてでありますけれども、この大仙陵古墳、あるいは誉田御廟山古墳が造営されるわけです。まさに、その日本列島の古墳を代表する前方後円墳の中でも、最大規模の前方後円墳を中心に形成されているのが、ご当地の古市古墳群と堺市の百舌鳥古墳群にほかならない、ということになるわけであります。したがって、まさにここには 5 世紀前半の日本列島最大の王墓がそれぞれ営まれている、ということになるわけです。これは、まず、やはり、この古墳群の最大の特質であろう、というふうに思うわけであります。

2. 「河内政権論」を裏付ける唯一の物証

それから 2 番目に申し上げておきたいのは、「『河内政権論』を裏付ける唯一の物証」であるということです。

ご承知のように、日本の古代史で「河内政権論」という考え方があるわけです。図 3 をご覧いただきたいんですけども、この図は、古墳時代、先ほどから申し上げておりますように、3 世紀の中頃から 6 世紀の終わりごろまでの 350 年間、この時代に、特に近畿地方中央部、いわゆる「畿内」と呼ばれる、ヤマト政権の政治や文化の中心であったと考えられる畿

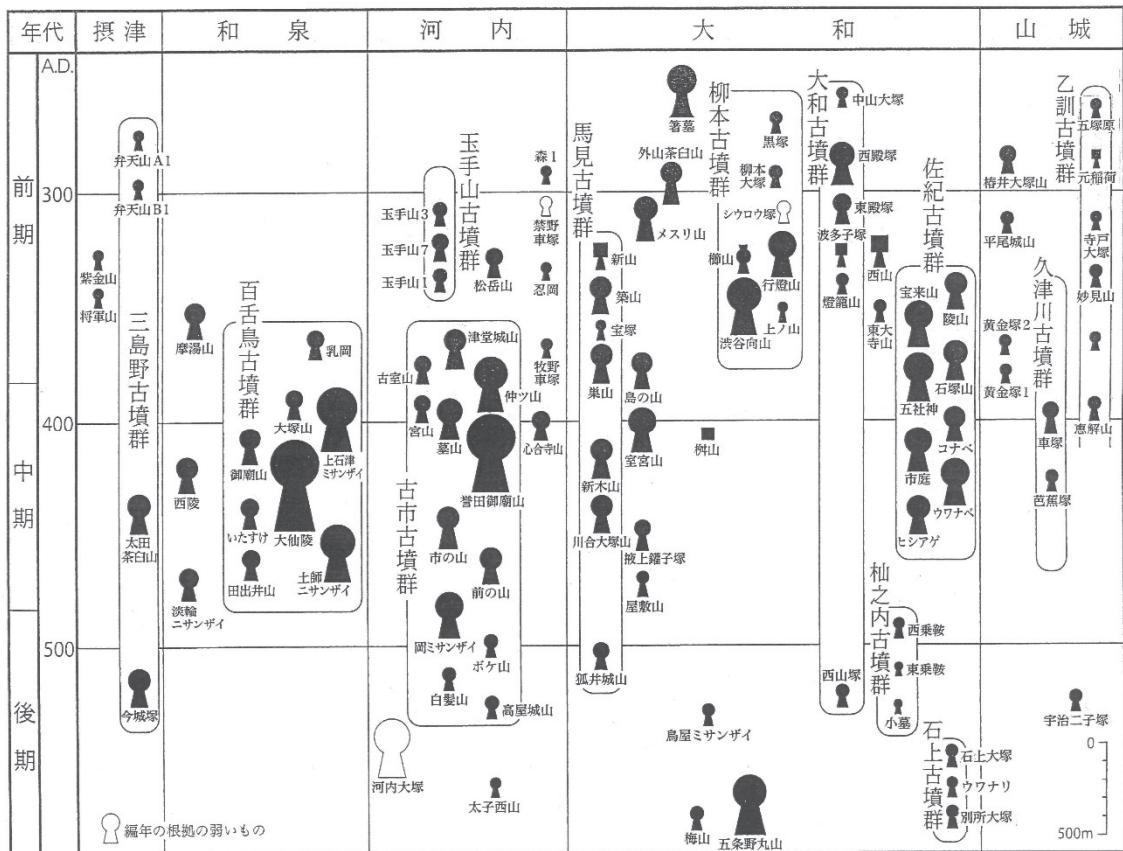


図3 畿内における大型古墳の編年

内地域で、営まれた墳丘の長さが 100 メートルを超えるような大きな古墳を年代的に整理したものです。上の方が古くて、下の方が新しくなるわけです。その図でもおわかりいただけるように、それぞれの時期、一番上が 3 世紀の半ば過ぎですが、それぞれの時期で他の地域の古墳と比べて、ずば抜けて大きな古墳が必ずあるわけですね。それが後に「大王」、「天皇」と呼ばれることになるヤマト政権のリーダー、盟主の墓であることはもう疑いえないわけです。これがいわゆる大王墓と私どももいっておりますが、大王の墓と考えられる。

その大王墓とおぼしき、隔絶した規模を持つ巨大な前方後円墳は、古い段階ではいずれも大和にあるわけですね。大和の、具体的には、1番目が箸墓古墳。2番目が、その右の方にある、漢字で書いた大和（おおやまと）古墳群の西殿塚古墳。3番目が箸墓のすぐ下の外山（とび）茶臼山、桜井市の外山茶臼山、それから4番目がメスリ山。それから5番目が、その右の、天理市の柳本古墳群にあります、現在宮内庁が崇神天皇陵に決めている行燈山（あんどんやま）古墳。6番目が、同じく宮内庁が景行天皇陵に決めている渋谷向山（しぶたにむかいやま）古墳、これは墳丘の長さが 310 メートルございまして、日本列島で古墳時代前期の最大の古墳です。いずれにしても、この初期の王墓とおぼしき大前方後円墳が 6 代にわたって奈良盆地の東南部、現在の天理市南部から桜井市地域にかけて、累々と営まれているわけです。この奈良盆地の東南部が、いわゆる本来の「やまと」と呼ばれた地域にほかなりませんが、いずれもそこに営まれているわけです。

ところが、なぜか 4 世紀の後半になりますと、この奈良盆地の東南部では大きな古墳は造られなくなってしまいます。それに代わって今度は、奈良盆地の北の端、後に平城京が営ま

れます地域の北のほうからさらにその北側の地、佐紀古墳群という、大きな古墳がこれまで累々と當まれた古墳群がありますけれど、その中に現れるわけです。その中に造られる。結論的に申しますと、この佐紀古墳群では、200 メートルを超える古墳がたくさんございますが、図 3 では上方に書いてある、宝来山（ほうらいさん）といった古墳もございます。これは、現在宮内庁が垂仁天皇陵に決めている古墳で、宮内庁の現在の測量図で測りますと 230 メートルぐらいなんですが、これは周りに水をたたえた濠で取り囲まれていて、その水位は、当然近世に農業用水として利用するため大幅に上がっているわけです。水位が上がるということは墳丘の長さが短くなっている。

本来は、少なく見積もっても 240 メートルはあった大前方後円墳だと思います。これはどう考えても大王墓と考えざるをえない。それからその下に五社神（ごさし）古墳といいますが、これは神功（じんぐう）皇后陵に決められている古墳です。これは 270～80 メートルある大前方後円墳。少なくとも、まず間違いなく、この宝来山と、それから五社神古墳の二つが大王墓であることは疑いえないだろう。宝来山が箸墓から数えて 7 代目、五社神古墳が 8 代目の王墓であろうということになるわけです。私はそういうふうに申し上げましたけど、これはどなたがご検討いただいてもほぼ近い結論になる。研究者の中で、この古墳とこの古墳の前後関係は違うんじゃないかななど、若干意見の相違はありますが、大体研究者のどなたが選ばれても、この 8 基を選ばれると思います。いずれにしても、箸墓から数えて 8 代目までの倭国王のお墓は、いずれも奈良盆地に當まれているわけです。

ところが、この 4 世紀の終わり、西暦 300 年代の終わりぐらいになると状況が変わってくるわけです。この佐紀古墳群では、その後の 5 世紀代になりましても、その図 3 にありますように、コナベ古墳、市庭古墳、ウワナベ古墳、ヒシアゲ古墳と大きな前方後円墳が累々と造られます。ところがこの段階、4 世紀末葉以降になると、もっと大きな古墳が、その左側のところ、この河内や和泉に現れるわけです。これが、河内のこの古市古墳群と、和泉の百舌鳥古墳群にほかならないわけです。具体的には、おそらく箸墓から数えて 8 代目が、先ほどいいました佐紀古墳群の五社神古墳です。そしてその次、9 代目が、この古市古墳群の仲津山古墳、現在宮内庁が応神天皇のお妃の仲津姫のご陵に決めている古墳で、これは墳丘の長さが 286 メートルあります。これがおそらく、大阪平野に最初に造られた大王墓だと思いますけれども、これが箸墓から数えて 9 代目です。その次は、今度は百舌鳥古墳群の方に移りまして、そこに上石津ミサンザイ古墳と書いてありますが、現在宮内庁が履中天皇陵



図 4 近畿中央部における大型古墳の分布

に決めているんですね。これは墳丘の長さが 365 メートル、日本で 3 番目に大きな大前方後円墳ですが、これがおそらく仲津山古墳の次に来るのでしょうか。箸墓から数えて 10 代目です。それからその次が、また古市に戻ります。5 世紀代の初め、誉田御廟山古墳、すなわち応神天皇陵古墳です。墳丘の長さが 420 メートルございまして、これが、おそらく、上石津ミサンザイ古墳に次いで造られた 11 代目の倭国王のお墓だろう。その次、今度はまたこれがなぜか百舌鳥の方に移るわけです。この大仙陵古墳、墳丘の長さが最近の調査では 500 メートルは下らないんだろうと考えられておりますけれども、これが、箸墓から数えて 12 代目に来るということです。いずれにしても、4 世紀の終わりから 5 世紀になると、大王の墓と考えざるをえないような隔絶した規模を持つ大前方後円墳は、奈良盆地から離れてこの大阪平野南部の、古市古墳群や百舌鳥古墳群に営まれるようになるわけあります。

問題は、一体これをどう理解するかということです。それまでずっと奈良盆地に営まれてきた大王のお墓が、4 世紀末から 5 世紀になると大阪平野南部のこの百舌鳥や古市に造られるようになる。これをどう考えるか。これについては、現在、考古学、あるいは古代史の研究者の中でも意見が分かれています。大きく二つの考え方には分けられています。

一つは、これはあくまでも奈良盆地の南の方に本拠を置く大王家といつていいかと思うんですが、ヤマト王権が、単にお墓だけを、何らかの理由で大阪平野に移したんだろうという考え方ですね。そう考える研究者も決して少なくはないわけです。

それに対して私どもは違った意見を持っておりまして、そもそも古墳というのは一体ど



図 5 古市古墳群



図 6 百舌鳥古墳群

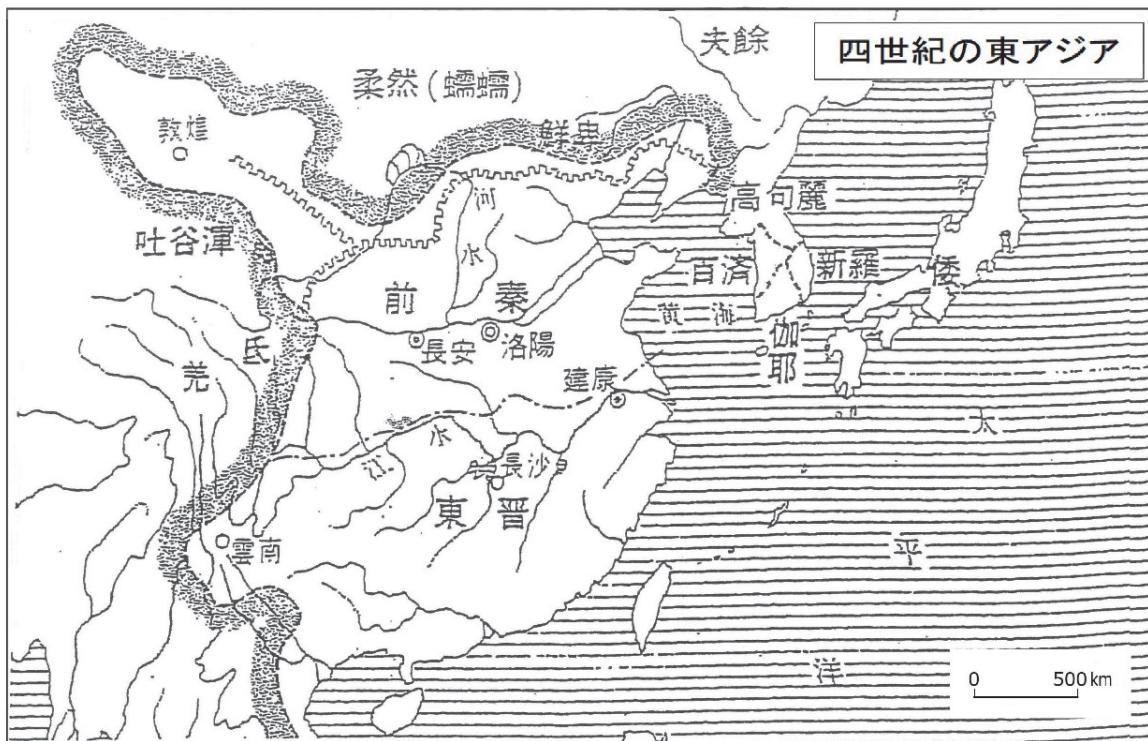


図7 4世紀の東アジア

こに造られるのか。『日本書紀』などを見ましても、古墳というのは、その政治勢力の本拠地に営まれるものであったことは、これは疑うことができないというふうに、私どもは思うわけです。これはいろいろな例があります。それを逐一お話ししている時間はございませんが、結論的に、古墳というのは、やはりその政治勢力の本拠地、本貫地に造られるものであったことは疑いえないだろうと思うわけです。ということであれば、大阪平野南部の百舌鳥や古市に大王墓が造られるようになるということは、とりもなおさず大阪平野南部の勢力が王権を掌握した結果にほかならない、ということになるわけであります。

実はこれは、その時代、この4世紀後半の東アジアの国際情勢を少し検討いたしますと、容易に理解できる出来事だというふうに私は思っております。それはどういうことかと申しますと、これまた皆さんよくご承知の通り、4世紀という時代の東アジアは大変な動乱期です。中国の西や北の方にいた、五胡と呼ばれる遊牧騎馬系民族が大挙して、中国本土に侵入してくるわけです。当時の中国は晋という王朝ですが、晋は、北半分を遊牧騎馬系民族に奪われて南に落ち延びて、そして都を今の南京、建康に移して、中国の南半分を支配するにすぎなくなるわけです。いわゆる南北朝時代が、それから約270年間続くことになるわけです。

あまりわかりやすい図ではありませんが、図7に、4世紀の東アジアの図をあげておきましたけれども、この段階では、中国の北半分は前秦という、遊牧騎馬系の民族の国が支配して、漢人の王朝は南半分を支配するにすぎず、これが東晋です。いずれにしても南北朝に分裂するわけです。

そしてその影響は、中国大陸だけにとどまらず、朝鮮半島にも及んでくるわけです。遊牧騎馬系民族であった五胡の一つで鮮卑族というのがいるわけですが、その鮮卑が、北燕という国を4世紀の中頃に建てるわけですが、この北燕が、朝鮮半島の北部から中国の東北部に

大きな力を持っていた高句麗を攻めて、この高句麗に大打撃を与えるわけです。高句麗は、多くの領土や人民を鮮卑の北燕に奪われ、大打撃を受けるわけです。そして、それ以降高句麗は、北で失ったものを南で回復するということで、積極的に南下策を進めるようになる。朝鮮半島の南にあった百濟や新羅は、まさに国家存亡の危機を迎えるわけです。

この時、新羅は強力な騎馬軍団を持つ高句麗には到底対抗できないということで、早くに高句麗に下って、何とか生き延びようとする。それに対して、百濟はあくまでも軍事力で高句麗と対決しようとするわけですが、このとき百濟が目をつけたのが倭国でした。当時の倭国は、文化程度はまだ遅れているわけですが、『魏志』倭人伝などをみてもわかりますけれども、人口は結構いたようですね。百濟は、倭国に目をつけて、これを味方に引き入れて高句麗と戦おうとするわけです。

当時の倭国は、鉄資源をはじめとする先進的な文物を全部朝鮮半島に頼っておりますから、そういうこともあって、当時の倭国は百濟の誘いに乗って、百濟と倭国の間に同盟が成立するわけです。このことを物語る一つの証拠は、この時、百濟と倭国の同盟の成立を祝って、百濟の王家が倭国王権に送ったプレゼントがあるわけです。今も奈良県の天理市の石上(いそのかみ)神宮に伝えられている七支刀という、先が七本に分かれた変な形の剣がございます。これが、銘文の細かい解釈は別にして、この時代、百濟王家から倭国王権に送られたものであるという解釈については意見がみんな一致しておるわけで、そういう七支刀の存在からも、疑うこととはできません。いずれにしても、この倭国も、東アジアの国際情勢の大きな変化に巻き込まれることになるわけです。

ところが、4世紀の中頃から半ば過ぎ、倭国の王墓はまだ奈良盆地の東南部に営まれているわけです。要するに4世紀の中頃から半ば過ぎ、これはいわゆる、卑弥呼の支配していた邪馬台国時代以来の流れをくむ、初期のヤマトの王権が続いていたわけですが、こういう非常に古い、邪馬台国段階以来の、きわめて宗教的、あるいは呪術的な性格の強い王権では、そういう新しい東アジア情勢の大きな変化に対応することは到底できなかつた、と私は思うんです。邪馬台国時代以来、畿内勢力の中では、この大阪湾岸の和泉北部の勢力、あるいは河内平野中心部には河内湖という大きな湖があり、この河内湖周辺の中河内、南河内の勢力が朝鮮半島との交渉・交易を担当していたわけです。ところが、東アジアの国際情勢の大きな変化とともに、これら河内や和泉北部の勢力が倭国の政治のリーダーシップを握るようになるのは、むしろ当然のことだと思うわけです。

そういうことで、当時の東アジア情勢の大きな変化を見ますと、王権の中核が、大和勢力に代わって、大阪平野南部の河内南部や和泉北部の勢力に取って代わったということは、十分納得できるわけです。私は、そういうことで、私だけではありませんが、この、4世紀の末葉から5世紀になると、ヤマト王権の中核は、大阪平野南部の勢力がこれを握るようになったものと考えていいだろうと思います。これをいわゆる「河内政権論」といっているわけです。そういう考え方をとる考古学、あるいは歴史学の研究者も少なくないわけですが、その唯一の物証はまさにこの「百舌鳥・古市古墳群」にほかならないということになるわけあります。これは、日本の古代王権の本質を考える上に非常に重要なことだと思います。

ただ、これについては、いわゆる三輪王朝から河内王朝への王朝の交代であるとか、そういうふうにお考えの先生方もおられますけれども、これは、中国における、秦が漢王朝に交

代した、そういう王朝の交代とは、私は性格が全く違うものだと思っております。先ほどもちょっと触れましたけれども、この時代というのは、日本列島各地の政治勢力は、この畿内の大和や河内の勢力を中心に政治連合を形成していた時代なんです。これは、その盟主権が交代しうるから、連合政権なんですね。これはあくまでも、その首長連合体制のもとにおける、中心勢力の交代にほかならないのであって、王朝の交代というようなものとは、性格が違うんだろうというふうに思っております。

それから、なおついでに申しておきますと、一つ面白いのは、奈良盆地の勢力が最初王権を握っていたんですね。それが4世紀の終わりから5世紀になると大阪平野の勢力に変わったわけですけれども、そしてそれは今私が申しましたように、決して王朝の交代というようなものではなくて、当時の政治体制がそういうものである。「政治連合」の世界で、盟主権は交代しうるものであったというふうに考えているわけであります。

文献による古代史の井上光貞先生が非常に早い段階にもう書いておられるんですけれども、井上先生は、河内政権の最初のリーダーは応神天皇だと考えておられたわけです。応神天皇は、『古事記』、『日本書紀』の系譜によると、男系ではそれ以前のヤマトの王統とはつながっていない。その奥さんである仲津姫が、古い、『古事記』や『日本書紀』でいえば、崇神、垂仁天皇の辺りの天皇と系譜的につながっている。ですから、応神は入り婿の形でヤマトの王家とつながっているんだということを明確に指摘しておられます。私は、それは事実に近いのではないかと思っております。

これはもうちょっと新しくなりますが、6世紀の前半に繼体天皇が出てこられるわけです。繼体天皇は、『古事記』、『日本書紀』では応神の5世の孫となっておりますが、これは古代史の先生方どなたも認められない。繼体がどこから出てきたかは別にして、ともかく、それ以前の王統とつながっていないことは間違いない。ところが繼体も、応神、仁徳の血を受け継いでいる仁賢天皇の娘さんである手白香皇后（たしかこうじょ）をめとて、婚姻関係を結んでいるわけです。ということは、繼体もまた、入り婿の形で、それ以前の王統とつながっているわけです。そういうことで、非常に面白いのは、王統は決して断絶していないということで、ともかくつながっているという、これはもう日本の古代王権の非常に面白いところではないかというふうに思っております。

いずれにしても、この「河内政権論」というものがあるわけで、私は基本的にはこれは成り立ちうる学説だと思っておりますけれども、その唯一の物証が、まさにこの「百舌鳥・古市古墳群」そのものにほかならないということです。

3. 倭国の文明化を象徴する歴史的記念物

それから、先ほど当時の東アジア情勢について一部お話し申し上げましたけれども、もう一つこの「百舌鳥・古市古墳群」の重要なことは、「倭国の文明化を象徴する歴史的記念物」にほかならないのではないかということです。

いずれにしても、百濟と同盟を結んで高句麗と戦うわけですが、高句麗と戦うといつても、当時の倭国には馬がいなかった。当然倭人たちは、騎馬戦術を知らなかつたんです。これでは、朝鮮半島に渡って強力な騎馬軍団を持つ高句麗と戦うといつても戦えないわけですね。このことは、当然百濟もわかっているわけで、百濟は自国の存亡がかかっておりますから、すぐれた馬を生産する技術、牧を作つて馬を生産する技術、それからその馬に乗るために必

要な馬具を生産する技術、それを持つたすぐれた技術者たちをたくさん倭国に送って、倭人たちに教えるわけです。これは百濟だけじゃなくて、百濟の影響下にあった伽耶諸国、日本列島に一番近い、小国が分立していた伽耶諸国も、多くの技術者を倭国に送って、倭人たちにそういう技術を教えてくれるわけです。

よくおわかりのように、馬具の生産技術というのは、木工、鉄工、それからその他金銅技術などの金属加工技術、あるいは皮革の技術、それから織物技術などの総合技術です。そういうすぐれた技術を持った人がたくさん海を渡ってくる。当然彼らは馬の文化に関わる技術だけじゃなくて、それに関連する様々な技術を、その他土木技術、建築技術、焼き物の技術などの様々な技術を、当然倭人たちに伝えるわけです。これは、狭い意味の技術にとどまらないで、例えば文字の使用をはじめとする様々な文化、学術や思想などが倭人たちに伝えられることになったということです。そういうことで、倭国がようやくこの段階を経て、東アジアの文明社会の仲間入りをすることができた。それがまさに、この4世紀の末葉から5世紀の前半という時代にほかなりません。

そして、実はこの日本の文明化を象徴するのが、ものとしては馬具なんですが、写真1でお示ししています、古市古墳群の応神天皇陵古墳の陪塚である誉田丸山古墳というのが、その前方部のすぐ前にありますが、この誉田丸山古墳から出てきた馬具です。見事な金銅製の透かし彫りの装飾を施した、鞍金具を持った馬具が2セット出てきているわけです。副葬されていたということなんですかけれども、これが現在も誉田八幡宮の宝物殿に保存されています。

実は、奈良盆地の3世紀後半から4世紀代の王墓から馬具は全く出てこないわけです。そして4世紀の終わりから5世紀になって、この、誉田御廟山古墳の陪塚である丸山古墳と、それからもう一つ、百舌鳥古墳群では、現在の履中天皇陵古墳である上石津ミサンザイ古墳の陪塚である七觀古墳というのから、これはもうちょっと古いんですけど、4世紀の終わりないし5世紀初頭の、やはり見事な馬具がセットで出てきているわけです。

要するに、日本の王墓に馬具が副葬されるようになるのは、「百舌鳥・古市古墳群」からなんです。これこそまさに、古代日本がようやく東アジアの文明社会の仲間入りしたことを



写真1 羽曳野市 誉田丸山古墳出土の金銅製鞍金具(1号鞍)
上：前輪 幅42.9cm 下：後輪 幅51.9cm
(国宝、誉田八幡宮蔵)

示す、象徴的な資料であろうというふうに思っているわけでありまして、そういう意味で、まさにこの両古墳群こそは、倭国の文明化を象徴する歴史的記念物にはかならないというふうに申し上げていいんではないかというふうに思っております。

4. 誉田御廟山古墳と「応神天皇陵」

それからもう一つは、もう時間がなくなりましたので結論だけを申しますが、そもそもこういう古墳の被葬者を決めるというのは非常に難しい。私どもも、大学でも、古墳の被葬者なんていうのは、ここに誰を埋めたと書いた墓誌でも出てこない限り決めることはできないんだということを教えられました。まさにそれは原則的にはその通りだと思いますが、ただ、例外もあるわ



写真2 誉田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）

けです。私は、その例外がこの古市古墳群の盟主墳である誉田御廟山古墳であり、百舌鳥古墳群の盟主墳である大仙陵であろうと思っております。

これは、大正年間の初めに京都大学やあるいは当時の東北帝国大学で教鞭をとられた喜田貞吉先生が早くに指摘しておられたことなんです。喜田先生は、「古墳墓年代の研究」というすぐれた論文をお書きになりました。この中で、結論的に申しますと、応神天皇陵のすぐ南側には、皆さんご承知のように誉田八幡宮があるわけです。応神天皇とそのお母さんである神功皇后をお祀りする誉田八幡宮。これが11世紀の中頃、平安時代の中頃には成立していることは疑いえないわけです。そういうことから、11世紀のこの平安時代の中頃に応神天皇の墓がわからなくなっていたなんてことはちょっと考えられないですから、その時代に、誉田御廟山古墳こそが応神天皇陵と考えられていたことは疑いえないということから、応神陵はまず間違いないだろうということを論文に書いておられるわけです。

ただしこれは、文献の先生がそう考えておられるだけなんで、考古学の立場からはやはり古墳の考古学的な年代研究というのが必要です。結論を申しますと、最近のこの時期の古墳に関する年代研究の成果から考えても、誉田御廟山古墳が、5世紀の初頭、5世紀の第1四半期のものであることはまず疑いえないわけです。応神天皇が活躍されたのは、古代史の先生方の研究によると、4世紀の末から5世紀の初め、5世紀初頭にかけてであることが明らかにされています。そうすると年代がぴったり合うわけです。そういうことから私は、この喜田説は、今でも認めていいだろうと思っています。応神天皇陵は、すでに平安時代の中頃に、そのすぐ南の隣接地に、応神天皇を祭神とする誉田八幡宮が存在するわけですから、そして考古学的な年代観も一致しているわけですから、応神陵を疑うのは極めて難しいと。この応神陵がよいとすると、考古学の研究成果からは応神天皇陵の次の大王墓はどう考えてもこれは、大仙陵古墳です。だから、応神陵がよければ仁徳陵もよいと考えざるをえないというふうに私は思っております。

ただ申し上げておかないといけないのは、そう簡単にこの時期の古墳の被葬者を決めら

れないということです。『古事記』、『日本書紀』には、百舌鳥には仁徳天皇とそのお子様の履中天皇と履中の弟の反正天皇の3代にわたって百舌鳥に陵墓が作られた、と書かれています。このうちの、大仙陵古墳を仁徳陵と考えていいというのは、それはそれでいいですが、実は、この百舌鳥古墳群には、大仙陵古墳よりも古い古墳があるわけです。それは、現在宮内庁が履中天皇陵に決めている上石津ミサンザイ古墳です。仁徳天皇のお子様のお墓となっていますが、年代は逆なんです。大仙陵古墳よりも、上石津ミサンザイ古墳の方が古い埴輪を出しています。そうすると、上石津ミサンザイ古墳が一体誰の墓かということが説明つかなくなるわけです。それから何よりも、先ほど申しましたように、この時期、4世紀末から5世紀の初めにかけての時期、大王墓は、古市、百舌鳥、古市、百舌鳥と交互に営まれています。この時期に3代続いて百舌鳥に王墓が営まれたということは、考古学的には考えられないわけです。

そういうことから、この時期の王墓の被葬者を決めるのは極めて難しい。そう簡単なことではないのです。ただそうした中で、たまたま、誉田八幡宮が存在することから、応神天皇陵が間違いなさそうだと。それがよければ、大仙陵が仁徳陵である可能性も極めて大きい、その蓋然性が極めて大きいということは想定できるんだということです。これは私どもにとって非常にありがたいことだというふうに思っているわけであります。

他にも少し申し上げたいことがあったんですが、もう時間が来てしましましたのでここまでにしておきます。「百舌鳥・吉市古墳群」について申し上げないといけないことはまだまだたくさんあるんですけれども、少なくとも、今申し上げましたように、それが列島最大と列島で2番目に大きな前方後円墳を、それぞれ中心に形成された古墳群であるということ。そしてそれが、いわゆる「河内政権論」というものを裏付ける唯一の物証にほかならないということ。それからまた、それは古代における倭国の文明化、これを象徴する、歴史的記念物なんだということです。それからこれは非常にありがたいことですけれども、それぞれの盟主墳、誉田御廟山古墳、それから大仙陵古墳については、あくまでも蓋然性の問題ですけれども、その盟主墳の被葬者をほぼ想定することができる、極めて珍しい大型古墳群であるということを申し上げておきたいと思います。

どうも、まとまりのない話を最後までご清聴くださいまして、ありがとうございます。私の話はここまでにしておきます。